

# 世界の農業機械・資材トレンド

ヨーロッパの農機実用テストの権威、ドイツ「profi」誌に掲載された世界の農機の最新情報

## Wide range of narrow tractors 南アフリカ



農業見本市「ビエン・ドネ・エクスポ」に展示されていたマッセイファーガソンの小型トラクタ3435V。

キャビンには高性能のフィルター付き空調が標準装備。薬剤散布を行なうブドウ園では、必須の装備だ。縦断面で構成された車体デザインや、狭い条間でも作物を傷つけない折りたたみ式のライトとミラーなど、現場のニーズに応えた設計がされている。開放された空間での運転を好むユーザには、オプションで取り外し可能なキャビンの屋根もある。

最も細幅のトラクタがマッセイファーガソンの3435V。横幅は、わずか1m。エンジンは、パーキンス社製の4.4ℓ4気筒。出力は使い勝手約60kW/82馬力。駆動系には、アンダードライブの付いた前進20速/後退10速のシンクロ式変速機とマニュアルのシンクロシャトルが標準装備される。PTOは、エンジン回転数1967rpm/mで540rpm/m、低燃費のEconモードなら1560rpm/mで同等の性能が出せる。

## 細幅トラクタの機種充実



西ケープ州シモンディウム市で恒例の農業見本市「ビエン・ドネ・エクスポ」。この見本市の対象は、南アフリカのワインや原料を作るブドウ園の経営者。今年の展示で特に目立ったのが、幅の細いトラクタのラインアップが大幅に充実し、構造やデザインの選択肢が広がったことだ。

大手農機メーカーは、全社が細幅タイプのトラクタを展示している。紹介されたモデルは、ケースIH社のJX1075N、クラースのネクティス247F、ドイツのアグロトンF80、ジョン・ディアの5415N、ランボルギーニのR150、ランドリーニのレックスノDT60、マコーミックのF75、マッセイファーガソンの3435V、ニューホランドのTN75NAなど。ブドウ園用スプレーヤーのタンク容量が近年大型化しているのに対応し、いずれのモデルも馬力が向上している。会場には、クボタやヒノモトの小型トラクタをベースにした、ブドウ園仕様様の小型トラクタも展示された。

## Picker builds modules on the move オーストラリア



これまで収穫後の綿花は、トレーラへ積み込まれてから、据付式のモジュール（綿花を固めたブロック）作成機に搬送されていた。ケースIH社の綿花収穫機「モジュール・エクプレス625」なら、収穫作業をしながら同時にモジュールを作る。

実用化に当たっては6年間、米国南部の綿花生産地でテストランを実施。何千個ものモジュール製造にも問題ない耐久性が実証済みだ。同社によれば、農家からの期待は熱く、すでに問合せが来ている。

## 1台2役の綿花収穫機



業界初、綿花の収穫と同時にモジュール（綿花を固めたブロック）を作成できる機械が、米国で発表された。ケースIH社の「モジュール・エクプレス625」だ。オーストラリアでは、性能や作業効率性を改善した後、2007年の綿花収穫期以降に販売開始となる予定。ケースIH社棉花部門のグローバル販売担当トレント・ハガード氏は、「棉花栽培における、収穫から出荷までの工程を革新する機械」と話す。

ハガード氏はいつも顧客から「棉花搬送用トレーラとモジュール製造機を両方とも使わずに済ませることはできないか」と要望を受けていた。本機を使えば、収穫とモジュール製造が、作業員1人機械1台で済む。これで顧客の要望にこたえられる、と同氏は自信を持つ。

「エクプレス625は、機械と労働力のコストを劇的に削減できる。トレーラから4536kgの綿花を積降ろしていたよりも短時間で、同量のモジュールが製造できる」とのこと。



## Making the most out of muck **アメリカ** 土壌と肥料を一括管理するソフトウェア



土壌管理の現場でも、コンピュータの利用が進んでいる。

農場内の圃場地図は、GPSで簡単に作成できる。この圃場地図に、土壌のサンプリングデータ・殺虫剤の使用状況・作物別の施肥データなどの情報を書き込める。

この農場では、堆肥の散布にクレイ社製の約8500ℓのマニアスプレッターを使用。この機体にもファームワーク社のソフトが搭載され、養豚場で作られた堆肥の栄養素のデータが、散布作業のたびに記録される。

堆肥の散布量を、コンピュータで記録管理する？ まるでジョージ・オーウェルの小説に出てくる近未来の管理社会のよう育の複合経営をしているウエベル農場では、これを実際に行なっている。

この農場では、ファームワーク社製の新しい土壌管理ソフトウェアパッケージ「ワークトラック・バージョン8.41」を導入した。州の環境問題担当者に、いつでも情報を提供できるようにするためだ。このソフトは堆肥の散布量をデータ化して記録保存し、州が指定する堆肥散布規則を遵守していることを証明する。ウエベル氏は「これで農薬散布・散布エリア・収穫量などが一括管理できる、ユーザー本位にできたソフトだ。満足して使っている」と使い勝手は上々のようだ。



堆肥の散布量を、コンピュータで記録管理する？ まるでジョージ・オーウェルの小説に出てくる近未来の管理社会のよう育の複合経営をしているウエベル農場では、これを実際に行なっている。

## Compost spreader feeds the apples **オランダ** 果樹園仕様のマニアスプレッター

詳しい情報は同社サイト [www.mollemamechanisatie.nl] (オランダ語) で調べることができる。

「モード3500」は、タンク容量が3500ℓ。横幅がタイヤの端から端まで1.4mしかなく、果樹園内を難なく走行できる。車幅は1m、駆動部分は、機体前部の十字型ラバーコンベヤーから堆肥を散布する構造だ。十字型コンベヤーベルトは、オフションで逆転させることもできる。水平方向に揺動できるスウィングドローバーを装備すれば、曲がり角でもトラクタでけん引できる。



オランダのフリースラント州北部のステイエンズ市にある農機販売業のモレマ社では、果樹栽培用に細幅のマニアスプレッターを製作した。



モレマ社製マニアスプレッター。タイヤの端から端まで1.4mというスリムな横幅。家畜の給餌機のような外観だ。

## Life goes on for frostbitten tractors **カザフスタン** 極寒地でトラクタと生きる

トラクタのエンジンには防寒用の覆いが必須。燃料系の凍結防止に、トラクタの運転手は必ず何らかの防寒対策を講じている。

カザフスタンの冬は、零下25〜30℃にもなる。まさに厳寒の地だ。日常生活での体感温度は、さらに低い。風速50kmにもなる冷たい風が、気温を零下45℃にまで下げることがある。人々とトラクタは、それでも働いている。



カザフスタンの冬は、零下25〜30℃にもなる。まさに厳寒の地だ。日常生活での体感温度は、さらに低い。風速50kmにもなる冷たい風が、気温を零下45℃にまで下げることがある。人々とトラクタは、それでも働いている。



カザフスタンのトラクタは、極寒地仕様のフル装備。暖機する場所はどこにもない。厳しい寒さは、燃料系統の手ごわい敵だ。